



伊藤忠遊全集

第七卷

昭和四年八月十日印刷
昭和四年八月十五日發行

伊藤痴遊全集 第七卷

(第六回配本)

著者 伊藤仁太郎

發行者 下中彌三郎

印刷者 濤川薰

東京市麹町區下六番町一〇

東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番
株式會社

平

凡

社

電話九段 三三一
三四六
四七六
七五四
番番番

本製田村

刷印・版製社會式株刷印同共

第七卷

伊藤博文
井上馨
目次

伊藤博文

序 言(一一二)……………三

家系と少年時代(一一二)……………八

吉田松陰と彼(一一〇)……………一四

京都密偵後の彼(一一五)……………一五

松陰の刑死と彼(一一九)……………一九

坂下事件と彼(一一六)……………二〇

永井雅樂襲撃の失敗(一一二)……………二七

藩論の決定と來原の切腹(一一九)……………一五

彦根密偵事件と彼(一一四)……………一六

彼の殺人事件二つ(一一八).....	三六
御殿山焼打事件と彼(一一二).....	二四一
木像の晒首(一一八).....	二六二
英國密航の發端(一一六).....	三〇四
英國密航の内命(一一六).....	三八
洋行費の調達(一一八).....	三六
横濱出帆の内情(一一六).....	三二
横濱より倫敦まで(一一六).....	六一
倫敦より横濱まで(一一九).....	三七
下關の商船砲撃(一一八).....	四九
潜伏中の伊藤井上(一一六).....	四三
講和談判の顛末(一一九).....	四二

井 上 馨

家系及其爲人	五〇五
維新前と維新後の彼	五〇六
元老としての彼	五〇八
長州征伐の起因	五二四
征長軍起る	五二六
長門守の手書	五二八
御前會議の準備	五三二
御前會議と彼	五三三
餘計な親切が仇	五三六
宋戸の調停は失敗	五三一
袖付橋の闇討	五三六

氣丈な母の介抱	五四〇
命運の強き人	五四二
井上の入牢	五四四
長州再征の事情	五四六
別府潜伏中の井上	五四八
征長軍と井上	五五〇
逸事談片	五六七

伊藤博文

序言

一

古今に涉り、世界を通じて、博文伊藤公ほどの幸運兒は、恐らく二人とはあるまい。其前身を言へば、眇たる一農夫から成上つた、足輕の子伴であつて、その死んだ時は、公爵で大勲位、樞密院議長正二位であつた。足輕の子だから、駈足で上つたのかも知れぬが、その昇進は、多く例のないことだ。

また、普通の人間として考へても、七十歳で死ぬのなら、壽命の上からいつても、苦情はあるまい。而かも七十歳の生涯を通じて、危ない劍の刃渡りも、幾十度かあつたけれど、いつも、調子よく免れて、身に擦傷一つ負なかつたとは、唯々不思議といふの外はない。兄弟同様の井上侯が、彼の大負傷を受けて、纔に生命を取り停めたのも、幸運に違ひないが、同じ道を歩みながら、負傷一つ受ぬのは、さらに其好運兒であつたことが、思はれる。殊に、その斃れた場所が、露國の勢力範圍たる、哈爾濱であつた杯は、如何に註文しても、ナカ／＼左様は參るまい。

その上に、狙撃した者が、朝鮮人であつた、といふに至つて、一段と其死についての興趣は、深いものがある。若し老衰して死んだとあつては、それこそ、官歴が、幾何立派であらうとも、肩書が、何れほどに澤山あらうとも、その死には、何の光彩も放たず、一個の隱居老爺が、死んだ迄のことである。然るに、死んだ場所といひ、その使命は、國際上の或問題であつた、杯と、傳へられるに至つて、その死は、更らに華やかなる死となつて、公人の歴史の最上

なるものとなつたのである。

然らば、伊藤が、果して偉人であるか、英雄であるか、將た、世界の政治家であるか、それは、見る人によつて種々の批評もあらうが、今之れを、詮議する必要はなく、只だ、非凡な人間であつた、といふ丈けて宜しい。敢て其他に、大きな名を求むるには、及ばないのだ。

維新の歴史は、勤王攘夷の歴史であつて、その一半は、長防二州の歴史である。而して、長防の歴史からは、伊藤公の名を、除くことは出来ない。勿論、伊藤公は、長防の歴史の主人公ではないが、或頁は、伊藤公を、除いては書けないのだから、矢張り平凡な人では、なかつたのだ。殊に、其立志の動機が、一篇の日本政記からだ、といふので猶更に面白い。最初から、勤王論の立場で、働いて居て、而も、攘夷論は、英國へ密航の後、断然捨て仕舞つて、開國論に變じたのである。其處が、頗る面白い所であつて、この書の骨子は、その前後の事情を、究むるに在るのだ。明治になつてからの、伊藤公は、常に順風に帆を揚げて、昇進も速く、彼れまでになる間、些しの滯滯もなく、ドシ／＼昇りつめて仕舞つた。併し、それには、當然の理由がある。何故かといふに、伊藤公は、少しも休息といふことを知らなかつた。七十歳迄の長い生涯に、一日も休みといふものがなく、不斷に働いて居たのだ。道樂を爲るうちにも、讀書は怠らなかつた。腰が曲つて、顔の皺が、眼につくやうになつても、何かしら役を勤めて居た。それが普通の人に、出来ない所である。無論、好運といふこともあつたらうが、その勉強して休まなかつた、といふ點は、運の神を、取留めた原因に、なつて居るのだ。

平生の品行上については、多少の非難も受けたが、それとても、女道樂位のもので、別に之れといふて、悪い事は、して居なかつた。政治家と、道學者とは、固より違ふのであるから、左様厳正しく言ふたら、一人として、完全なものなからう。口に綺麗なことを言ふて、藝妓買はしないで、秘密で、下女を孕ませて居たら、猶ほ悪い。假し女道樂が、善くないことだとしても、他に美點が、多く在つたら、それで差引にはなる譯だ。要するに、伊藤公

は、現はれた行跡に就いて、非難は多かつたが、却つて隠れたる行爲に、美しい點の多かつた人である。

第一に、斯ういふことを、考へて貰ひ度い。當時の元老なるものが、實際に於て、殆んど老衰して、何の役にも立たなかつたのは、誰しも認むる所であるが、猶ほ幾分の勢力を、保つて居たのは、全く其の壯んな時代の響きて、僅に元老といふ名譽を、維持して居る丈けのことであつた。然るに伊藤公は、他の元老と異つて、恰も賣出しの花形のやうに、最期まで活動して居た。それは、果して、何ういふ次第であつたか、之は深く研究して見度い。また立志傳中の一人として、現代の青年にも、大に之れを研究して、貰ひ度いと思ふ。

一一

日本人の通弊は、總體に隱居好きの一事である。早いのは三十歳位から始まるが、之れは極く悪いことだと思ふ。年老つてから、足腰の利かなくなつた場合は格別だが、若い身でそんなに、隱居を急ぐにも當るまい。所が、世間の没理漢の多くは、宛て隱居を、名譽の如く、心得て居るのだから、實に呆れて仕舞ふ。その日本人のうちに、伊藤公のやうなものもあるから、些さか人意を強うする。古來稀矣と言はれた、七十歳になつても、猶ほ隱居せずに、働いて、それが爲めに殺された、といふのだから、此一事に於ても、伊藤公は豪いもので、眞に尊敬す可き人である、と言ふても差支へはあるまい。

日清戦争が終つてから、さらに軍備の擴張で、増税案が、議會へ出たことがある。非増税の一派は猛烈な運動を始めて、議會の混亂は、尋常でなかつた。その時に、伊藤公は、山縣内閣を扶けて、非常に盡力したものだ。當時の自由黨が、多少の削減を加へて、増税案の通過に務めたのは、伊藤公の骨折から出来たことであるが、議會が無事に済んでから、帝國ホテルに於て、其慰勞會が、開かれた時、伊藤公は、四五の青年と約して、月ヶ瀬の觀梅に行かうといふ話があつた。約束の日になつて、青年連中は、大磯の邸へ押かけると、案外にも、月ヶ瀬行は延期ちやといふ

挨拶であつた。青年は、大層怒つて、談判を開くと、伊藤公の曰ふには、歐洲から、新刊の書物が着いたので、自分も、讀み度いし、翻譯も爲せ度いと、思ふて、違約は申請しないが、今年は勘辨して呉れといふのであつた。違約されたのは癩に障つたけれど、その事情が、讀書の爲めとあつては、何とも致し方がない、一同は、澁い顔をして、引退つた。

この時の伊藤公は、最も最早、耳順になつて居るし、侯爵で、元老の首席であつた。其人が、讀書の爲めに、觀梅行を延期した、といふことは、今の自堕落な青年が、宜しう手本とすべきことではないか。この事實は、其時の一人であつたから、どこ迄も證明する。兎に角、藝妓賢に、浮名を洗して居る半面にも、斯うした美しい點はあつた人である。

長州閥の人で、在り乍ら、動もすれば、それを忘れるのが、伊藤公の特色であつた。自分の意に叶ふて、之れは人物である、見れば、必ず情實を捨て、其人を引上げた。一例を擧ぐれば、陸奥宗光伯に對する心盡しの如き、慥かに後世へ傳ふ可き美談である。陸奥伯は、明治十年に謀叛して、それが爲めに、入獄した人である。政府の側から見れば、何の位惜いか知れないのだ。されば、在獄中に、毒殺するといふ風説さへ、あつた位だが、それを救ふたのは伊藤公であつた。曾て、明治の初年に、外務の仕事を、一途に行つたことがあつて、陸奥伯の手腕を、認めて居る。其處で、閑僚のうちに、反對するものがあつたにも不拘、刑餘の宗光を引上て、國務に參與するやうにした。陸奥伯も、其知遇に感じて、一生を伊藤公の下に、託したのであつた。

それから、藩閥出身の政治家が、酷く政黨を、嫌つて居るのに、はやくも憲政黨へ、内閣を明渡したり、進んで政治會を組織して、その首領となつたり、之れが爲めには、山縣公と、火を擦るやうな、喧嘩もして居る。兎に角、伊藤公は、通常の人間ぢやなかつた。寸尺は分らないが、幾何か他のものよりか、頭は、上へ出て居た人である。好きだとか嫌ひだとか、いふことは、全く別問題に屬する。只感情と猜忌を忘れて、公平に見れば、矢張り豪かつたの

である。その一代の履歴は、波瀾も多く、曲折もあつて、頗る有益で、面白いことが多い。關係人物が、維新の當時に活動したるものばかりであるから、その傳記は維新史の一部である。また長防の側面史として、見ることも出来るのだから、著者は、楽しんで、本傳を記述する。維新史に、趣味を有つ諸君には、特に精讀して貰ひたい。前口上も長くなつたが、之れ丈けのことは、是非言ふて置く必要があつた。

歴史家や、學者の書く、伊藤公と、私のやうな立場のものが講ずる、伊藤公とは自ら其味ひにも、違つた趣きはあらう。そんな點も、對照して見れば、多少の感興は、起らうと思ふ。

伊藤公の逝つたのは、昨今のやうに思つて居たら、既う廿幾年になつた。想へば、茫として夢のやうな心地もする。足輕の子から、身を起して、終りには國葬の禮を以て、祀られた杯は、多く例のないことであつて、公も、今は快然として、谷垂の墓石の下に、眠つて居ることであらう。

家系と少年時代

一

偉人豪傑の生れた土地には、必ず名山大川の在ることが、昔からの紋切形に、なつて居て、詩にも、歌にも、それでないといふ都合が悪く、名山大川は、偉人豪傑の生の親といふ格で、幾分の光りを増すのであるが、何うかすると例外があつて、根ツから面白くもない、平凡の土地から、非凡の人物の飛出すことがある。

周防國熊毛郡に、東荷村といふのがある。徳山の次ぎの驛に、島田といふ土地があつて、それから一二星をはいつた片田舎だが、見上ぐるほどの大山もなく、これはと思ふほどの名川もなく、極めて平凡の村落である。

林姓を名乗る家が、大凡五六十軒も在つて、惣本家、本家、分家、分家、それは、實に煩はしいほどの、大きな一族であつた。その分家のうちに、林信吉と謂ふ人があつて、正直者との評判はあつても、何となく働きの鈍い男で、家格も、村では舊いのだが、何時も貧乏生活で、細い煙さへ時に絶えなんと爲ることがあつた。妻のお琴は、秋山といふ家から、嫁入つたのだが、之れは又た不思議と、負し魂の男優りて、よく、良人を扶け、朝から晩まで、眞黒になつて稼ぎ通すといつた、氣丈な女性であるから、それが爲めに、家計の幾分は、補はれて居たのだ。夫婦の間に、子供が、只つた一人、名を利助と謂ふて、その鍾愛は一と通りでない。何をいふにも、一粒者の事とて、父の信吉が利助を可愛がることは、また一層であつた。

勝氣のお琴は、良人の氣象を吞込んで、農事には鈍い、信吉も、流石に武士とて、假し貧乏な生活はして居ても、何處となく氣位の高い、凜とした所のあるを見抜いて、無理に勧めて、萩の城下に移らせた。それは外でもないが、武家奉公に、身を立て、林の家名を、擧げて貰ひ度いの心からであつて、健氣な妻の心を聞いては、信吉も、奮發せずにはゐられなかつた。住み馴れし、束荷村を背後に、萩の城下を指して、急ぎ出立した。

家主の信吉が留守になつてからは、宛て女性の姿はなく、自分は、男性になつた覺悟で、必死の穢きに、愛兒の利助を、育てながらの働き振りには、村の人一人として、感服せぬものはない位であつた。

利助の生れたのは、天保十二年の九月二日で、父の信吉が、萩へ出たのが、嘉永三年であるから、利助は丁度、十歳の時であつた。幼い時から虫氣もなく、之れまで育つて來たのだが、長ずるに従つて惡戯のはげしいことは殆ど村の持餘しものであつた。時には、子供らしくない惡戯に、大きな野郎が、苦しめられることもあつた、といふ位だ。況して、同じ位の歳頃の子供は、何時も、利助に虐められて、その苦情を受けることが、日に幾度か知れないこともあつて、母のお琴は、心氣を腐らすこともあつた。

『母さん、只今歸りました』

顔も手も、墨黒々と、草紙代りに塗つた儘、駆け込んで來た、利助は、三隅勘三郎と謂ふ寺小屋の師匠の許から、今歸つて來た所である。

草紙を、投げ込んで、直ぐに飛び出しさうな、容子を見て、母のお琴は、

『鳥渡お待ちなさい』

利助は、澁い顔をしながら、

『何、母さん』

『少しお話しがありますから、まア此方へおいでなさい』

何時とも違つて、母の顔色が悪いから、利助は、逡巡して居た。

『何故、上りません』

『ハイ』

恐々ながら、母の前に座つた。

『機會があつたら、言はうと思つて居ましたが、今日は、母さんの話すこと、黙く聞いて居なければ、不可ませんよ』

『ハイ』

『お前は何故悪戯ばかりして、手習を勵まないのですか』

『否、私は手習して居ります、悪戯は致しません』

『また嘘ばツかり、今朝もお師匠様へ行きがけに、女の子を、溝に突落した、といふではないか、何故左様ことをします』

『あれは、母さん、理由があるのです』

『何んな理由があつても、それは不可ません。對手が、弱い女の子ではありませぬか、それは松之進さんが来て、悉

皆お話は、聞いて居ります』

『松公の奴、彼人は多辯だから、いけないや』

『何といふても、今日のことは悪い。それに今でこそ、お百姓はして居ますが、御先祖は武家ですよ、武士が弱い女の子を、磨めるといふことがありますか』

『エツ、それぢやア、私し武士の子ですか』

蛇は寸にして、其氣がある、利助の眼は、異様の光を有つて、膝を進めた。